修 論 要 旨

沖縄米軍基地周辺のロック音楽文化について

木村　俊介

沖縄は、太平洋戦争の敗戦から1972年の本土返還までアメリカ合衆国の植民地であり、その後も米軍基地が存在し続け、本土とは異なる文化を形成してきた。米兵は明らかに沖縄の人々に差別意識を持っており、支配・被支配の対立が存在した。コザは沖縄本島中部に位置し、国道330号線と嘉手納米軍基地へと向かう空港通りが交差する胡屋十字路を中心として繁華街が形成されている。現在は嘉手納基地だけになっているが、本土返還以前は基地の中心部にコザの街があるという状態であった。コザ中心街には、２つのレコード店、10店舗以上ライヴ・ハウスがある。

コザのロックの歴史は、1965年のヴェトナム戦争から始まる。沖縄の地元ミュージシャンが米兵相手のクラブや基地内で演奏をし、本土とは異なるロック音楽文化が発達した。むしろ、コザでロックが栄えたのは基地の街であったからこそといえよう。ヴェトナム戦争期のロックの主流は、アメリカの黒人のブルーズに白人が独自の解釈を加えたハード・ロックとよばれるジャンルであった。最前線からきた兵士の要求に応えることが重要であり、当時の英米で流行したロックのコピーが中心であった。海兵隊・海軍・空軍といった部隊ごとに音楽的嗜好も異なるので、ミュージシャンには多彩なレパートリーが必要とされた。

先行研究には、沖縄国際大学石原昌家ゼミナール編『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』がある。戦後コザに住む人々の生活や音楽について様々な証言を緻密に集めたものである。証言したミュージシャンは、ヴェトナム戦争時代から活動していた人々ばかりで、彼らの後続世代に関する情報が少ない。また、これが発表されたのは1994年であるため、その後の街の移り変わりが分からない。

一般書では、沖縄市役所企画部平和文化振興課編『ロックとコザ（改訂版）』は、前述した沖縄国際大学石原ゼミによる４人のロック・ミュージシャへのインタヴューをもとに編集されたものである。内容は、『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』のダイジェスト版といったところである。また、DeMusik Inter.の編集による『音の力＜沖縄＞コザ沸騰篇』、インパクト出版会の編集による『インパクション』103の特集、「沖縄へ、そして沖縄から」といった、いくつかの雑誌で特集や記事の一部で取り上げられたことがあるが、紹介程度にとどまっている。そこで、本論文では、現在のコザにおいて音楽的内容までに踏み込んだ分析を行なう。

第１章の第1節では、コザが米軍基地の存在と密接な関係にあるため、米軍駐留のきっかけとなった沖縄戦以後から現在までの沖縄・コザの戦後史の概要を、沖縄歴史教育研究会と新城俊昭の共著による『高等学校　琉球・沖縄史（2001新訂・増補版）』、中野好夫

と新崎盛暉の共著による『沖縄戦後史』、新崎盛暉による『沖縄現代史』に基づいて述べる。また必要に応じ、他の文献を参照しながらまとめた。第２節では、日本の本土のロック・シーンの1960年代半ば、GSブーム以降から現在までの本土のロック・シーンの変容を確認した。ヴェトナム戦争の影響で、沖縄では米兵の数が増加した。それに伴いコザでは、米兵相手のライヴ・ハウスが作られた。第３章でコザ・ロックと本土のロック・シーンの比較を行なうため、篠原章による『J-ROCKベスト123-1968 ～ 1996』、200ロック語事典編纂委員会の編集による『200ロック語事典』、藤本国彦と市川誠の編集による『ロック・クロニクル・ジャパン Vol. 1 1968-1980』、『ロック・クロニクル・ジャパン Vol. 2 1981-1999』、南田勝也による『ロックミュージックの社会学』に基づいて概略を説明した。また必要に応じ、他の文献を参照しながらまとめた。

第２章では、コザ・ロックの歴史の概要を、沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール編『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』に基づいて述べる。また必要に応じ、他の文献や筆者自身のインタヴューを参照しながらまとめた。

第３章第１節では、現在のコザのライヴ・ハウスの営業形態を、筆者自身のフィールド・ワークで得た情報を元に、説明した。ヴェトナム戦争の頃と違い、1990年代以降、基地縮小の影響で米兵の数が減少するに伴い、以前は数え切れないほどあったライヴ・ハウスも現在は10店舗ほどに減少している。現在、コザの米兵相手の店舗の営業日は減少傾向にある。多くのライヴ・ハウスで洋楽のカヴァー曲を中心としたバンドの演奏が行なわれるのは、金、土曜日のみである。加えて、米兵のペイ・デー（給料日）、独立記念日をはじめ、米国の祝日などに不定期のライヴが行なわれる。すなわち、米兵の休日状況によって、店の営業日が決まっていくのである。

このような経営形態では、ミュージシャンの多くが、音楽活動だけでは食べていくことができないことは、容易に想像できる。たいていの場合、彼らは、他の仕事にもついている。例えば、塾の講師、理容師などの職につきながら音楽活動を続けている。

週末の夜、コザの街は、その様相を一変させる。平日の何倍もの米兵とその家族がメイン・ストリートの空港通りを中心に闊歩し、英語が飛び交う。また、平日にはない屋台が出現し、焼き鳥や焼きそばといった軽食やビールが売られる。一方、平日や昼間は、閑散としている。日本人観光客の多くは、コザが盛り上がるは週末だけという情報を持たないままふらっと立ち寄るだけなので、ゴースト・タウンといった印象を持つようである。地元住民もその点を認めており、観光客からコザのお勧めスポットを聞かれた場合、「週末夜に再び訪れてください。」と答えているのを、筆者は何度も目にした。また、平日開店しているライヴ・ハウスは、バーのみの営業、もしくは沖縄住民向けの日本語の自作曲を演奏するバンドに場所を提供しているのが現状である。逆に言えば、日本語のバンドは週末にはほとんどの場合、演奏することはない。米兵の多くは英語の楽曲がかかっていないと、すぐに店を出てしまうし、米兵の間で店の評判が落ちてしまうからである。例えば、ライヴ・ハウス、7 th HEAVEN KOZAの経営者である比嘉レイは、週末の営業は、米兵が来店する23時を基準に、前半を日本語のバンド、後半を英語のカヴァーを中心とするバンドという風に分けている。テクニックがあっ

ても、英語が出来ない場合は、ステージに立たせることはない、と説明している。ここにも「基地経済に支えられた街＝コザ」という社会の縮図が現れている。

海兵隊員の中には、素行が荒いものが多い。沖縄住民とのトラブルによって米軍全体へのイメージ悪化を恐れる上層部が、基地外への外出禁止令を出すことがある。また、普段の素行の良い者だけが外出を許可されるということもある。2004年７月の調査時には、外出禁止令が発令されていた。特別に外出が許可された独立記念日（７月４日）以外は海兵隊員の数が以前の調査より少なかった。同年９月の調査の時も発令は継続中で、米兵の姿はまばらであったと記憶している。こうした、米軍の政策一つとっても、基地経済に依存するコザには打撃となる。米兵相手のライヴ・ハウスにとっては痛手であり、営業状態は悪化する一方となる。

ライヴ・ハウスは、21 ～ 22時頃に開店し、深夜３時～ ４時頃に閉店するというのが普通である。ライヴが始まるまでは、バーのようなスタイルで、23時頃から45分のライヴがあり、15 ～ 30分の休憩を挟んで再びライヴというのが大体の目安と言ってよい。ただし、これは客の入りや盛り上がり具合によって変動する。実際1時間半以上ライヴを行なう場合もある。つまり、当日の客入りや状況によって左右される。深夜０ ～ １時頃のライヴが最も盛り上がる。

各々のライヴ・ハウスには、ハウス・バンドと呼ばれるその店お抱えのバンドが1つ以上存在する。例えば、ライヴ・ハウス、7th HEAVEN KOZAのハウス・バンドは８-BALL、FUJIYAMAはPAVLOV'S DOGS、HIDE AWAYはO-ROCKである。バンド・メンバー自身がそのライヴ・ハウスの経営をしているケースもある。

第２節、第３節では、現在コザで米兵相手に音楽活動しているバンドを、フィールド・ワークで得た証言を元に、紹介した。英米ロックといっても、さまざまな種類があり、現在のコザでは、各バンドごとに演奏する時代やジャンルが決まっており、住み分けができていることがわかった。

第４節では、紹介したこれらのバンドの横の連携やこれを支えるシステムに関して、フィールド・ワークで得た証言を元に、説明している。現在のコザには、40代の日本人で音楽活動をしているものが少ない。彼らは、1980年代に活動を始めた。テクニック的には、ヴェトナム戦争時代に活動を始めたヴェテランたちと張り合えるだけのものを持っていた。しかし、少しでも自分の個性を出そうとするとヴェテランたちが彼らの活動を妨害した。その当時は、コザ以外の場所では、活動の場がなかった。ライヴをやるためには、自分たちでイヴェントを開催するか、学園祭でやるかのどちらかであった。それ以外は、練習スタジオで音を出している程度であった。1980年代に音楽活動を始めた人のほとんどは、30代になる頃、安定した生活を送るため、音楽活動を続けることを諦めてしまった。

20代のミュージシャンは、紫やコンディション・グリーンの本土での活動をリアル・タイムでは、知らない。彼らは、1990年代よりヴェテランたちの姿を見て育ってきた。米兵相手に活動する20代の若いミュージシャンは、ヴェテランに対し強い憧れを持ち、ヴェテランの意見を迷惑に感じたことはない。ヴェテランのステージを見に行き勉強している。教科書みたいな存在が近くにある環境は、恵まれている、という証言を行なっている。コザでは、20代で米兵相手の活動を行なっ

ているものは少ない。原因は、米兵やヴェテラン・ミュージシャンに対して怖いイメージを持っている。また、米兵相手の活動の場合、演奏能力よりも、英語が出来るのかどうかという点が、重要になる。特に、ヴォーカルの英語が不充分である場合、米兵を集客することは難しいことが分かった。

第５節では、ヴェトナム戦争時代から現在までのコザ・ロックの歴史を改めて見直し、コザ・ロック・バンドが抱えてしまった問題をフィールド・ワークで得た証言を元に、考察した。戦後からコザは基地に強く依存してきた街であった。経済的に基地に依存しているからこそ、変化することが許されなかった街である。米兵がいないと経済が成り立たない。コザは基地が間近にあるので、ロックが発生したが、それによって停滞を余儀なくされていることがわかった。そして、コザの社会的矛盾はヴェテラン・ミュージシャン良く現れているのである。

コザでは、本土とは異なるロック音楽文化が発達した。むしろ、コザでロックが栄えたのは基地の街であったからこそといえよう。現在のコザの米兵相手のロック・ミュージシャンは、1970年代当時から演奏を続けてきた50代以上のヴェテラン世代と、20代前半〜30代半ばの若い世代に２極分化してしまっている。すなわち、中間世代ともいえる40代のミュージシャンがほとんどいない状況なのである。

コザのヴェテランのロック・ミュージシャンたちは、少年時代をアメリカ文化に囲まれて育った。自分たちの支配者であり、豊かな国、アメリカに憧れた。アメリカ文化の代表であるロックを演奏することで、彼らに近づこうとした。

1970年代前半、コザのロック・シーンは、ヴェトナム戦争への恐怖心に駆られ、荒んだ精神状態の米兵たちを相手にして成長していった。コザのミュージシャンは、演奏に難癖をつけてくる米兵たちを目の前に、月に２〜３日程度しか休みがない音楽漬けの生活を送っていた。彼らの中から、紫とコンディション・グリーンという２つのバンドが誕生し、本土のロック・シーンへ進出していった。彼らの特徴は、それまでの本土のロック・バンドとは違う、ロックの本場である英米のサウンドを想起させるものであった。それと同時に、米兵との葛藤から生まれた音楽であるがゆえに、彼らの音楽は、米兵以外の聴衆には、強烈な印象を与えることもあった。本土のレコード会社は、彼らに本土のロック・シーンに適応した音楽を演奏するよう促した。コンディション・グリーンは、少年時代に憧れたアメリカでも演奏したが、そこでも基地の街から生まれた音楽が、認められることはなかったのである。コザのロック・ミュージシャンは、自分たちの流儀を押し通したため、日本本土にもアメリカにも自分たちの居場所を見つけることは出来なかった。1980年代前半頃までには、古巣のコザへと帰っていった。

1980年代に英米ロックの分野では、1970年代に流行したハード・ロックを様式化させたヘヴィ・メタルという新たなジャンルが登場した。1970年代に本土で活躍したヴェテラン・ミュージシャンたちには、絶えず変化する英米のロック・シーンを消化する動きは見られなかった。コンディション・グリーンのヴォーカル、川満勝弘は、「いつまでも英米の流行を追いかけていたら、自分の立っている場所が分からなくなってしまう。自分が心地良いと感じる音楽を演奏している」と、説明している。すなわち、1980年代のコザには、時代の変容に合わせることなく、1970年代の音楽

を探求し続けたロック・ミュージシャンがいた。彼らの中には、1970年代までのロックを正統なものと位置づけ、1980年代以降に登場したロックを認めようとしないものもいる。

また、1980年代には、紫やコンディション・グリーンといった第１世代の活躍に憧れた後進世代が、活動を始めた。第１世代にしてみれば、後進世代は自分たちの活動を脅かすライヴァルであった。ヴェテランのミュージシャンたちが、後進世代の活動を妨害したため、コザでは、後進世代は満足な活動を行なうことは出来なかった。また、1980年代には、現在のように、アマチュア・ミュージシャンがライヴ演奏できる場所が少なかった。ライヴをやるためには、自分たちでイヴェントを開催するか、学園祭でやるかのどちらかであった。それ以外は、練習スタジオで音を出している程度であった。また、1983年以降毎年夏に開催されているPEACEFUL LOVE ROCK FESTIVALに出演するミュージシャンは毎回同じで、「トリ」は必ずヴェテランが演奏する。行き場所がない後輩たちは、たいていの場合、30歳を過ぎるころには、生活の安定化を選び、音楽活動の継続を断念してしまっている。1980年代にヴェテラン・ミュージシャンたちには、若手を育成するという考えはなかった。

1990年代初頭に本土で起こったワールド・ミュージックの影響で、沖縄土着の音楽が注目されるようになると、コザのロック・ミュージシャンの中にも、いち早くそれに注目し、新たな活動を開始した者もいた。それが、コザ・ロックを代表するバンド、紫をはじめ数々のバンドで活躍してきたジョージ紫や宮永英一である。英米ロック一辺倒であった彼らは、本土での活動を通じて故郷に戻った時、改めて沖縄の土着の文化に魅力的に感じ、自らの音楽に取り込むことを考え始めた。こうして生まれたジョージ紫のニライ・カナイ・トライアングルや宮永英一の琉球マジックは、米兵の前で演奏していたロックとはまったく異なった音楽であった。ジョージ紫は1996年に、宮永英一は1993年に、それぞれ新たな音楽を提案したが、既にワールド・ミュージック・ブームは、1990年代前半に終焉を迎えていた。彼らが、コザの外に向けて自らの存在をアピールしようとした時、沖縄は本土の音楽シーンから再び忘れ去られていたのである。

1990年代半ばごろには、コザのロック・シーンとは関係ないところで、本土のロックから影響を受けた音楽シーンが確立された。例えば、安室奈美恵、SPEED、DA PUMP、Cocco、オレンジ・レンジなどが挙げられる。この時代に登場したミュージシャンの特徴は、沖縄性を前面に出さなかったことにある。彼らは、1972年の本土復帰以降に生まれた世代であり、米軍相手に葛藤した記憶のない世代である。米兵相手に活動を続けてきた世代にとって、目指したのはアメリカであったが、若い世代にとっては日本本土の音楽シーンであった。地方性ではなく本土との近似性に力を注ぎ、本土の音楽シーンの一部に取り込まれることを望んだのだ。

1990年代半ばになると、ヴェテラン・ミュージシャンたちは、米兵相手にロックを演奏する世代が、自分たちの下にないことに気づき始める。1998年にヴェテラン・ミュージシャンが中心となって沖縄県ロック協会は、彼らと下の世代との交流を目的に設立された。しかし、自分たちの音楽が継承されずに消えていくこと危機感が、本当の要因かもしれない。

本論文の目的は、冒頭で提示したように、沖縄米軍基地周辺のロック音楽文化について、先行研究であまり触れられることのなかった

音楽的内容や、先行研究が発表された1994年以後のコザの街の移り変わり、先行研究で取り上げられることがなかった世代のミュージシャンの証言を検討することであった。

コザでロックの音楽が発生したのは、間近に基地があったからである。1972年の本土復帰以降、沖縄の他の地域では、本土との一体化が進められた。しかし、コザは基地があるがゆえに、取り残されてしまった。経済的に基地に依存しているからこそ、変化することが許されなかった街である。米兵がいないと経済が成り立たない。

本土のロック・シーンを経験したヴェテランたちは、沖縄性を出さないと生き残れないと気づく。しかし、出来上がった音楽は、米兵向けのロックではなかった。米兵相手の音楽と自分のアイデンティティの狭間で、コザ・ロックは中途半端な状態に置かれている。若い世代の人々は、日本語で自己表現をして、本土を目指せばよいが、ヴェテラン・ミュージシャンは、もはやコザの外で活動することも出来ない。葛藤の結果として、沖縄性を前面に出して外部に表明することも出来ないし、本土を目指すには年をとり過ぎていて、どちらにも向かうことが出来ないのである。すなわち、コザの社会的矛盾は、ヴェテラン・ミュージシャン良く現れているといえよう。現在では、ヴェトナム時代と比べて、米兵の数は減っていき、経済的には縮小されている。これまでと同じようにはいかないのである。このような状況に陥っているので、下の世代はコザには夢も希望も持っていない。

本論文の執筆にあたって、コザでフィールド・ワークを行い、ロック・ミュージシャンの方々に、インタヴューを行った。しかし、演奏者側の事情はわかったが、聴き手の米兵に対しては、時間の関係上、話を聞くことができなかった。ライヴは、演奏者と観客が作り上げるものであり、米兵たちの意見を聞くことができなかったのが、心残りである。また、フィールド・ワークの際、コザには、ロック音楽以外にも、ジャズや民謡があふれていることがわかった。ロックはコザの音楽文化の一部なのである。ロック以外の音楽との考察によって、コザにおけるロックの位置についても考えていきたい。